

「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」を訪ねて & クリムト展 ウィーンと日本1900

3年に一度開催される国内最大規模の芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」が開催され、会場である名古屋市美術館・愛知県美術館・豊田市美術館、そして足を延ばしてメナード美術館※を訪ねました。各美術館所蔵の名作、ウィーンの大匠クリムト展、そしてあいちトリエンナーレの現代美術を美術研究家・沼辺信一氏の名解説のもと鑑賞しました。

※メナード美術館はあいちトリエンナーレの会場ではありません。



エコール・ド・パリを堪能 名古屋市美術館

アメデオ・モディリアーニの「おさげ髪の少女」②、マルク・シャガールの「二重肖像」、藤田嗣治の「夢」など、エコール・ド・パリ(パリで活躍した外国人と一部のフランス人作家たちの総称)を堪能しました。またアンゼルム・キーファーのダイナミックで不吉な絵画「シベリアの王女」や、フリーダ・カロの「死の仮面を被った少女」などの常設展を鑑賞しました。

青木美紅の「1996」③はあいちトリエンナーレ展示作品。刺繍で描かれた絵画の迫力に、思わず驚かされました。



「あいちトリエンナーレ2019」メインビジュアル

目に見えるものにするのが アート 愛知県美術館

実在の風景や人・モノではなく、頭に浮かんだ概念やアイデア、メッセージを目に見えるものにする現代美術。今回驚かされた現代美術作品が、ヘザー・デュレイハグボークの「Stranger Visions」④。タバコの吸殻やチューインガムからDNAを採取・分析して当人の顔の3Dモデルを作り出してしまうという、恐ろしささえ感じる作品です。

ミリアム・カーンの「美しいブルー」⑤は、鮮やかな青いグラデーションが印象的な作品です。おぼろげに浮かび上がる悲しげな白い影は、迫害される人々を



①名古屋美術館の前で ②アメデオ・モディリアーニ
 《おさげ髪の少女》1918年頃—名古屋美術館蔵
 ③青木美紅《1996》—あいちトリエンナーレ2019
 ④ヘザー・デューイ=ハグボグ《Stranger Visions》
 —あいちトリエンナーレ2019 ⑤ミリアム・カーン
 《美しいブルー》13.5.17 Photo: Daniel Martinek
 Courtesy of WAKO WORKS OF ART ⑥袁廣鳴
 (ユエン・グアンミン)《日常演習》—あいちトリエン
 ナーレ2019 ⑦グスタフ・クリムト《人生は戦いなり
 (黄金の騎士)》1903年—愛知県美術館所蔵 ⑧
 解説する沼辺先生。背景は新聞で覆われたレニエール・
 レイバ・ノボ《革命は抽象である》2019 ⑨ゴミ袋
 で覆われた《革命は抽象である》2019 ⑩フィンセ
 ント・ファン・ゴッホ《一日の終り(ミレーによる)》
 1889~90年—メナード美術館所蔵 ⑪名古屋美術
 館。手前はカルダーの「ファブニール・ドラゴンⅡ」。
 ⑫豊田市美術館 ⑬豊田市美術館からの眺め



描いたものでしょうか。

袁廣鳴(ユエン・グアンミン)の「日常演習」⑥は、ドローン空撮による作品です。屋外広告やエレベーターには息遣いがありながら、道路に人影は無く、車は一台も走っていない異様な映像は、台湾で毎年行われる防空訓練を撮影したものです。平和な街に潜む戦争の脅威を感じます。

現代美術の巨匠クリムト

豊田市美術館

グスタフ・クリムトは19世紀末のオーストリアを代表する芸術家です。初期は「ヘレーナ・クリムトの肖像」のような写実的で繊細なタッチの作風でしたが、後に代表作「ユディトⅠ」や「人生は戦いなり(黄金の騎士)」⑦のような金箔を多用する華やかなものへと変化します。そんなクリムトも「アッター湖畔のカンマー城Ⅲ」などの風景画を遺しています。正方形のキャンバス、ほんの少しだけ描かれた空という構図から、クリムトらしさが垣間見えます。

あいちトリエンナーレ2019では、「表現の不自由展:その後」の中止に伴い、複数の作家が抗議のため展示を一時中止しました。そんな中、キューバのレニエール・レイバ・ノボ氏は展示を変更し、自分の作品を、展示中止を伝える新聞⑧やゴミ袋⑨で囲み隠し抗議の意を表現していました。

光と影の名作展

メナード美術館

「ダブルシルエット—光と影が語ったもの」というテーマの企画展を鑑賞しました。ロード・モネの「チャリング・クロス橋」は、ロンドンが霧で霞む様子を巧みに表現しています。フィンセント・ファン・ゴッホの「一日の終り(ミレーによる)」⑩は、夕方の田園風景を粗い筆使いで見事に表現しています。また、アレクサンダー・カルダーの針金彫刻「ゴルフアー(ジョン・D・ロックフェラー)」は、壁に映し出されたシルエットも素敵でした。

美術館そのものがアート

黒川紀章氏による名古屋美術館⑪、谷口吉生氏による豊田市美術館⑫は、「美術館そのものがアート」と呼ぶべき素晴らしい建物。美術館には、展示だけでなく、建物を鑑賞したり景色⑬を眺めたりする楽しみ方もあります。遠くに見える豊田スタジアムは黒川紀章氏による設計です。二日間にわたり、素晴らしい絵画や展示を数多く鑑賞しました。沼辺氏の解説は、作家や作品評のほか、美術界の裏話も交えた大変楽しいものでした。

紙面では、感動を十分にお伝え出来なことが残念です。ぜひ美術館に足を運んだり、次回の美術鑑賞に参加したりするなど、ご自身の眼で美術を堪能ください。